

テーマ	多様な個や集団を支える教師の指導観・子ども観～体育の視点から～
発表者 (所属)	企画者，司会者：小野絵美（長野県松本市立筑摩小学校） 話題提供者：近藤佑生（三重県桑名市立長島中部小学校） 村松崇志（長野県長野市立篠ノ井西小学校・信州大学教職大学院） 下平綾乃（長野県茅野市立湖東小学校・信州大学教職大学院） 三浦大栄（岩手県滝沢市立滝沢第二小学校） 指定討論者：清水由（桐蔭横浜大学）

## 【発表概要】

### 《企画趣旨》

子どもたちの実態や抱えている困り感は多様である。とくに体育科の授業づくりや体育的行事では、例えば技能面での差が大きかったり、集団行動が苦手な参加が苦手だったり等と様々な実態や困り感とそれに応じた課題があるように感じる。どの子ども主体的に活動するために、それを支える教師が大切にしていることは何か。

本シンポジウムにおける話題提供者は、「教育委員会として多様な学校や教師を支える研修を実施してきた」教師、「多様な個の実態を協働的な学びで支えてきた」教師、「学校全体で子どもが創る体育的行事に挑戦した」教師、「多様な困り感がある子どもどの子ども輝く授業づくりに挑戦する」教師と、それぞれの立場は異なる。そのため、それぞれの教師が大切にしている指導観<sup>(1)</sup>、子ども観<sup>(2)</sup>にもズレが生ずるかもしれない。

しかし、それぞれの観を時間の許す限り語り合うことで、共通項を見出し、明日からの実践で大切にしていきたい教師のあり方について明らかにしていきたい。

#### 参考文献

- (1) 安里三矢子「生徒の主体的な学びを支える教師の指導観の転換—中学校における総合的な学習の時間を核においた校内体制の構築—」, 琉球大学大学院, 2024
- (2) 前嶋和彦:「子どもの自律的な学びに求められること—教師の子ども観に着目して—」, 信州大学大学院実践研究報告書, 2023

### 《話題提供》

三重県桑名市立長島中部小学校 近藤 佑生

### 「多様な学校や教師を支える研修のあり方」

体育科に関する教職員研修について、教職員のニーズやスキルなど、求めているものによってさまざまであると考えられるが、どのような内容のものがあると参加しやすいだろうか。教職員が授業UDの視点を取り入れた体育科の研修を進めていくためには、どのように研修を実施していくとよいのだろうか。

筆者は、昨年度まで教育行政事務局職員としてさまざまな業務に従事していた。そのうちのひとつとして教職員研修の企画・運営もあった。体育科における授業UDの視点を含めた多様な学校や教師を支える研修のあり方について、各地域の研修の状況も踏まえながら、議論を深めていきたい。

＜話題提供＞

長野県長野市立篠ノ井西小学校・信州大学教職大学院 村松 崇志

### 「多様な個を支える体育授業～水泳の授業を問い直す～」

全員着替えが終わるまで待ち、そこから体操。気がつけば授業時間の 10 分終了。その間に着替えの遅い子への不満を口にする子、力を持って余した子ども達のけんかが始まる。先生の笛に合わせた水慣れ、コース別に泳ぎ、技能差を分けた指導。泳げない、水が怖い、水泳楽しくないとプールに入ろうとしない子ども。これは私の毎年のプールの授業の課題である。岩田(2012)は、「友達との温かい関係のもとに水中での多様な身体操作を繰り返し楽しめないか、またそれを通して、身体的自由性を拡大させ、泳法習得のベースとなる身体経験や基礎的な感覚づくりができないか。」と述べている。そんな考えから生み出された教材「グループ泳ぎ」を少しアレンジした実践と着替えを終わった子どもから学習を始める水泳学習の授業の進め方について具体的な子どもの様子をもとに話題提供を行い、技能や意欲の差が生まれやすい体育の授業のあり方についてご意見いただきたい。

引用文献 岩田靖:『体育の教材を創る』,大修館書店,pp110-116, 2012

＜話題提供＞

長野県茅野市立湖東小学校・信州大学教職大学院 下平 綾乃

### 「子どもの自己効力感を育む児童会活動の転換」

日本財団(2024)による 18 歳意識調査では、日本は「自分のしていることには、目的や意味がある」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」の項目が6カ国中最下位であるということが指摘されている<sup>(1)</sup>。これは、2年後の調査でも同様の課題を指摘されており<sup>(2)</sup>、これらの課題解決に向け、日本の学校現場における学習者の環境を改善していくことが求められている。

一方、学校現場ではしばしば「どうせ、先生が決めるから。」といった子どもの声が聞かれたり、職員の声からも「もっと自分からという気持ちを大事にしてほしい」「子ども自身の役割を作ることで、主体的に取り組むことができるようになるのでは」といったものが聞かれたりする。

ここには、児童会活動は子どもが主体的に取り組むものであるはずなのに、「主体的にやらせようとしている」教師側の認識の矛盾があるのではないかと考える。そこで、児童会活動を、子ども自ら学校生活の課題を見出し、その解決策を考え実践する活動として取り組むことを通して自己効力感を育むことができるようなものにしたと考え、実践に取り組んできた。

そこでの取り組みの一つとして、本当の意味での「子どもが創る運動会」のあり方を児童会活動を切り口に学校行事の転換をしようと実践を行ってきた。事例では、子どもが創る運動会としての取り組みや、体育としての授業との関連、教師同士の子ども観の転換に関わる仲間づくりについて提案したい。

参考文献

(1) 日本財団:「18 歳意識調査『第 46 回-国や社会に対する意識(6カ国調査)-』報告書」,

[https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new\\_pr\\_20220323\\_03.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2022/03/new_pr_20220323_03.pdf),pp.8-11,(閲覧 2024 年1月 20 日)

(2) 日本財団:「18 歳意識調査『第 62 回-国や社会に対する意識(6カ国調査)-』報告書」,

《話題提供》

岩手県滝沢市立滝沢第二小学校 三浦 大栄

### 「多様な個を UD の視点から紡ぐ～体育の実践を通して～」

クラスの中には、「運動が得意な子」「運動が苦手な子」「運動するのが大好きな子」「運動するのが嫌いな子」と、多様な個が存在する。その中で、運動が「得意な子」「好きな子」だけが活躍すれば、「苦手な子」「嫌いな子」はもっと苦手意識をもったり嫌いになったりする。一方で、運動が「苦手な子」「嫌いな子」だけに配慮をしよう授業になると、得意な子や好きな子にとっては大変つまらないものになってしまう。このように、大きなジレンマを抱えながら授業に臨まざるを得ない状況は、学習者にとっても授業者にとっても辛い。

能力差や情意差にかかわらず、どの子も楽しく学びながら「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すには？私は、「自己決定」「折り合い」「協働」の3要素が大きく関わってくると考える。そして、この3要素を引き出す鍵となるのは、多様なかわり合いを通じた学習に取り組むことである。そこには、対話を通じた「共感的態度」が欠かせない。

では、対話を通じた「共感的態度」とは、いったいどのようなものだろうか。私は、下記のように考える。

#### 【対話を通じた「共感的態度」】

対話の相手	対話場面	共感的態度例
教材	・参加	・楽しい・やってみよう
自分自身	・理解・習得・活用	・わかった・できた・もっとできそう
仲間	・応援・アドバイス ・話し合い・賞賛 ・チーム練習	・ファイト!!・〇〇してみない? ・〇〇するといいね。うまくいったね。 ・教えてもらってありがとう。
第三者	・(技を)見せる ・プレイする	・格好よく見せよう。

上記のように、多様な「対話」を組み込むことで、「自己受容・他者受容・他者貢献」の共感的態度が醸成され、「多様な個」が、目的に応じた集団として変容していくのではないだろうか。

本シンポジウムでは、UD の視点から技能面の向上や情意面の向上、「対話」に焦点をあてながら、どの子も楽しく学習に取り組むことができる体育授業について話題提供したい。